



EPO TOHOKU
東北環境パートナーシップオフィス
Environmental Partnership Office Tohoku

3.11 あの時 教訓事例集

2011年3月11日（金）14時46分。

東北の人々は
多くの悲しみと喪失の中で
多くのことを学びました。

「東日本大震災から得られた教訓を知りたい」

その声にお応えして
「3.11 あの時」レポート集より
異口同音に語られた「学び」を抜き出し
教訓事例集としてお届けします。

卷頭言

東日本大震災では、あたかも巨大な動物が大怪我をしてそのはらわたを見せたかのように、平時では見られない社会のいろいろなものが眼の前に現れた。見慣れていた街並みは、津波に襲われた地域は言うに及ばず、大きな被害のなかった地域でさえ、その形相を変えていた。人々は、人智を超えた大自然の脅威を前に、それぞれの感性でそれらを見つめ、そして考えた。被災地では誰もが哲学者であった。人それぞれが、自分の言葉でそれぞれの思いを語ったことそのものが、被災地の外、そして後世に伝えるべき貴重な資料であった。EPO 東北がまとめたレポート「3.11 あの時」全3巻はそのような資料であった。本書は、それらから抜き出したそれぞれの教訓を「教訓事例集」としてまとめたものである。

震災から得られた教訓は、たんに“被災したらどうなるか、どうするか”ばかりではなく、“常日頃どうすべきか”を教えてくれている。被災地を訪ね歩くと離島や陸の孤島と言われる地域ほど、エネルギー、水、食料の日頃の蓄えや地域自給、そしてお互いの助け合いが行われており、震災直後数日間の孤立時にそれだけの安全・安心を得ることができた。それに対して、都市に近い地域ほど自分たちだけではどうすることもできず、事態は深刻であった。我々が生きていくためには、エネルギー、水、食料、そして相互扶助が不可欠である。そしてこれらを得ることは、日常にあっては本来、豊かで楽しいことであり、地域の伝統文化として受け継がれてきたのである。

震災は地域社会とは何なのか、地域コミュニティとは何なのか、地域の風土とは何なのか、そしてその環境と共生して暮らすということはどういうことなのかなど、いろいろなことを教えてくれた。被災地では環境活動の意味、環境教育の意味、協働の意味、地域の知恵とそれを伝えることの意味等々を深く考えさせられる具体的事象が次々と眼前で展開された。環境問題は、それぞれの地域のそれぞれの人々の営みと、それをとりまく環境との相互作用の総体であり、震災はその最たるものであった。震災後、EPO 東北が積極的に被災地に飛び込み、地域の現実を見つめ、地域をつなぐ当事者として問題発見につとめたことは必然であり、またそれは高く評価できる。

しかし、震災とそれによって引き起こされたさまざまな事象あるいは復興の過程で遭遇した個々の人々や地域にとって、教訓として昇華するには、あまりにもつらく、悲しく、不条理な事柄がブラックホールのように未だ多数存在することを、我々は忘れてはならない。それらが、人々あるいはそれぞれの地域社会、あるいは我が国の中で受入れられ整理されるまで、真の復興は終わらないのである。得られた多くの教訓とともに、それらのブラックホールの一つ一つをたとえ答えが得られなくとも当事者に寄り添い見つめ続けることが 1000 年に一度と言われる大震災に出会い、亡くなられた多くの方々からいのちを託された我々に課せられたつとめであると思う。

監修者

新妻 弘明

■監修者プロフィール

新妻弘明（にいつまひろあき）／東北大学名誉教授・日本*EIMY*研究所 所長

東北大学名誉教授、日本*EIMY*研究所所長。工学博士。専門はエネルギー・環境学、計測工学、地熱開発工学。2002 年にエネルギーの地産地消である*EIMY*の概念を提唱し、宮城県、岩手県、福島県、長野県等で実践的活動をおこなっている。地域環境学ネットワーク運営委員、EPO 東北運営評議員会会長、宮城県再生可能エネルギー等・省エネルギー促進審議会会長、ほか。著書に「地産地消のエネルギー」、「ノコギリストの詩」ほか。



■目次

巻頭言・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P.2
 目次・・P.3
 はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P.4
 東北環境パートナーシップオフィス（EPO 東北）とは・・・・・・・・・・P.4
 「3.11 あの時」県別掲載件数・協力者内訳・・・・・・・・・・・・・・・・・・P.5
 時間軸で見る東日本大震災 2011 年 3 月 11 日からの 1 カ月間・・・・・・・・P.6
 東日本大震災 2011 年 3 月 11 日からの 1 年間・・・・・・・・・・・・・・・・P.8

1 支援

●「支援」ページについて・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P.10
 （1）連携で広がる支援・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P.12
 （2）避難者の活力を生む支援・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P.14
 （3）震災を忘れず、伝える支援・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P.16
 （4）支援団体と被災地をつなげる支援・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P.18

2 エネルギー

●再生可能エネルギーとは・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P.20
 ●コラム「デュアル・エネルギー・パス」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P.21
 ●「エネルギー」ページについて・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P.22
 （1）地域自給できるエネルギー・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P.24
 （2）ガソリンの代替となったエネルギー・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P.26

3 伝承×ESD

●ESD とは？ / 伝承と ESD について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P.28
 ●「伝承×ESD」ページについて・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P.30
 （1）後世に東日本大震災を伝える・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P.32
 （2）地域の特性を伝える・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P.34
 （3）災害時の生活を伝える・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P.36

4 価値観

●「価値観」ページについて・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P.38
 （1）自然と人のあり方・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P.40
 （2）社会のあり方・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P.41
 （3）暮らしのあり方・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P.42

「3.11 あの時」参考レポート

●「3.11 あの時」参考レポート 一覧・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P.43

■はじめに

東日本大震災以降、東北環境パートナーシップオフィス(EPO 東北)では環境活動に関わる NPO、企業、行政、福祉施設、個人など多様な立場の方に、震災当時の様子とその後の活動についてお話を伺い、「3.11 あの時」と題したレポートにとりまとめ、冊子やウェブサイトを通じて全国に発信してきました。支援活動の記録とともに現場の状況を全国へ発信することを目的に始めた取組でしたが、時間の経過とともに内容は様相を変え、支援活動の成果と課題、大震災からの教訓として感じていることが語られるようになりました。「3.11 あの時」レポートは次第に、現場の情報発信から支援活動の内容と大震災から学んだ教訓を記録し発信するレポートへと役割を変えていきました。

平成 23 年度から平成 25 年度まで、3 年間続けてきたヒアリングの中で、異なる場所で、異なる活動に取り組んできた人々が、大震災を経て同じ教訓を得ていることに気がつきました。ヒアリングの中で繰り返し繰り返し聞くキーワードは、東北の人々が全国へ、そして後世へ伝えなければならないと思っている、まさに「東北の教訓」だと捉えています。そして、全国から「今後起こるかもしれない「もしも」のために、大震災から得た教訓を知りたい」との声が多く寄せられています。本書は東北の想いと全国からの声に応えるために、「3.11 あの時」レポートから「東北の教訓」を抜粋し、とりまとめた事例集です。数ある教訓の中から「支援」「エネルギー」「伝承」「価値観」の 4 つのキーワードに焦点を絞り紹介しています。

① 非常時に必要となる「支援」

支援活動に携わる皆様は、現場で生じる数多くの課題に対して知恵を絞り、よりよい支援のあり方を考え活動に取り組んできました。これらの事例は、活動者にとって非常時における重要な知見になると感じています。

② 暮らしになくてはならない「エネルギー」

ライフラインが停止し、エネルギー不足に悩まされた中、避難所や復旧現場では地域で自給できる再生可能エネルギーが活躍しました。再生可能エネルギーは環境面だけでなく、リスク管理の側面からも有効なエネルギーであると分かりました。

③ 防災のための知見を伝える「伝承」

非常時に起こるであろう問題を知らなければ、対策を立てることはできません。大震災では、過去の災害からの教訓を知っていたからこそ減災につながった事例も見られ、伝えることの大切さを実感しました。今ある学びを後世に伝え、活かしてもらうための活動が生まれています。

④ 震災をきっかけに生まれた新たな「価値観」

東北の人々は、大震災により多くの悲しみと喪失を経験し、自分の生き方や考え方を見つめ直しました。その中で、多くの皆様から異口同音に語られた「価値観」がありました。

東日本大震災から得られた「東北の教訓」を本書を通じて多くの皆様と共有することで、これからの備えの参考にいただければ幸いです。

■東北環境パートナーシップオフィス（EPO 東北）とは



環境パートナーシップオフィス(EPO)は、環境省が全国 8 箇所に設置した環境分野専門の中間支援組織です。環境保全・保護活動に取り組む NPO や行政、企業など多様な主体の連携を支援し、地域の環境課題解決に向けた協働取組を促進することを目的としています。EPO 東北は東北地域の環境活動を促進し、人と人をつなぐ拠点となることを目指し、2006 年 7 月に開設されました。

東日本大震災発生後は、現地の声を広く全国へ届けようと「3.11 あの時」と題したヒアリングレポートに取り組みました。2011 年から 2013 年までの 3 年間にわたって継続し、102 件のレポートを Web-site で発信、3 冊の冊子を発行しました。また、現地ヒアリングによって把握した地域課題を広域的に議論することで課題解決の糸口を探ろうと、さまざまなテーマによる東北ブロック交流会の企画・開催にも取り組んでいます。

東日本大震災の被害状況

発生日時：2011 年 3 月 11 日（金）14：46

発生場所：三陸沖

（北緯 38 度 06.2 分 東経 142 度 51.6 部 深さ 24km）

最大震度：7

マグニチュード：9.0

被害状況（2016 年 12 月 9 日現在）

	死者	行方不明者	家屋全壊	道路損壊	橋梁被害	堤防決壊
岩手県	4,673	1,123	19,507	30	4	-
宮城県	9,540	1,232	83,000	390	12	45
福島県	1,613	197	15,194	187	3	-
全国合計	15,893	2,556	121,739	4,198	116	45

※出典：警察庁緊急災害警部本部発表

「平成 23 年（2011 年）東北地方太平洋沖地震の被害状況と警察措置」

■冊子「3.11 あの時」 県別掲載件数

青森県

Stage 2011 1 件

Stage 2012 2 件

Stage 2013 1 件

合計 4 件

秋田県

Stage 2011 0 件

Stage 2012 4 件

Stage 2013 1 件

合計 5 件

山形県

Stage 2011 0 件

Stage 2012 4 件

Stage 2013 1 件

合計 5 件

福島県

Stage 2011 7 件

Stage 2012 8 件

Stage 2013 2 件

合計 17 件

岩手県

Stage 2011 9 件

Stage 2012 0 件

Stage 2013 7 件

合計 16 件

宮城県

Stage 2011 21 件

Stage 2012 12 件

Stage 2013 13 件

合計 46 件

その他

Stage 2011 2 件

Stage 2012 4 件

Stage 2013 3 件

合計 4 件

平成 23（2011）年度

掲載件数：40 件
取材期間：H23.4 月～
H24.3 月



平成 24（2012）年度

掲載件数：34 件
取材期間：H24.6 月～
H25.2 月



平成 25（2013）年度

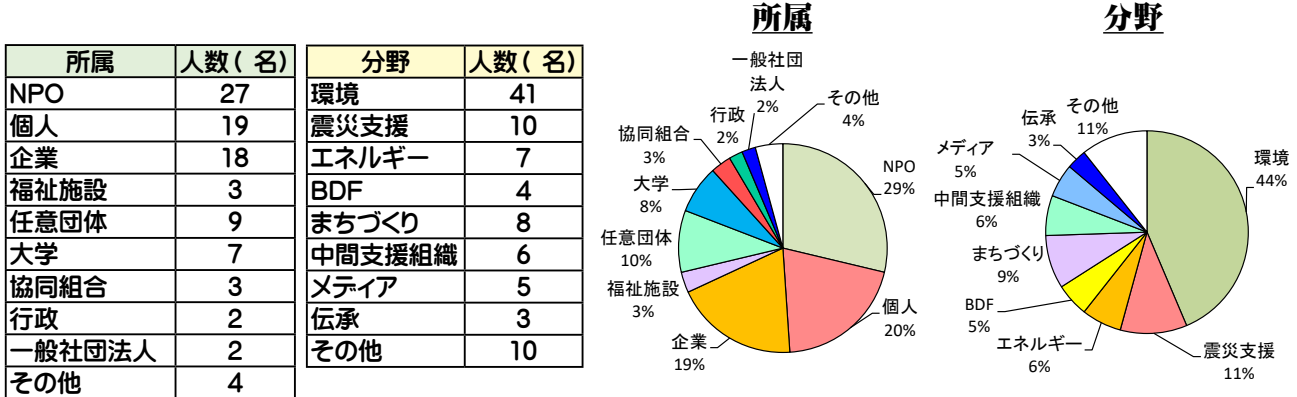
掲載件数：28 件
取材期間：H25.4 月～
H26.1 月



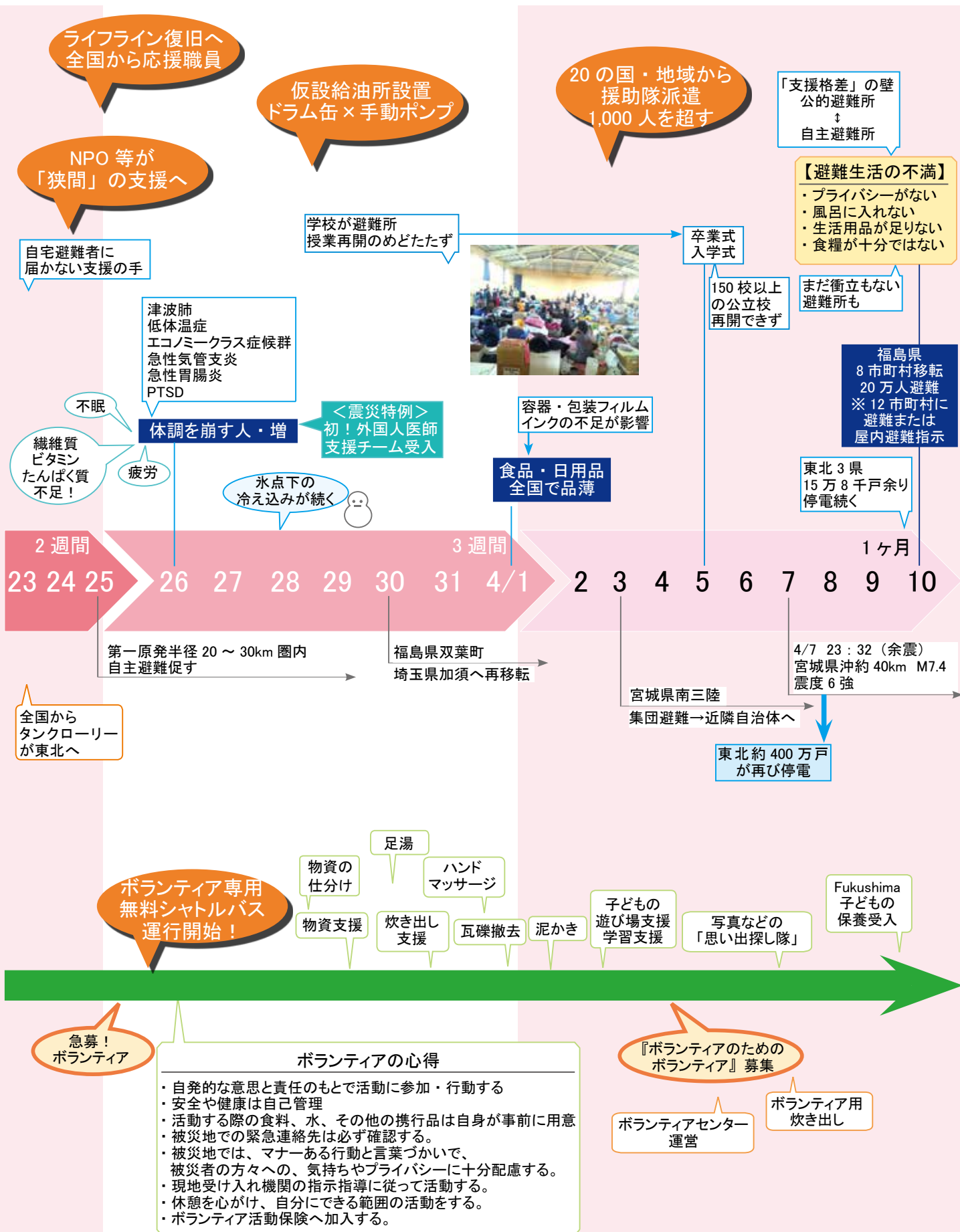
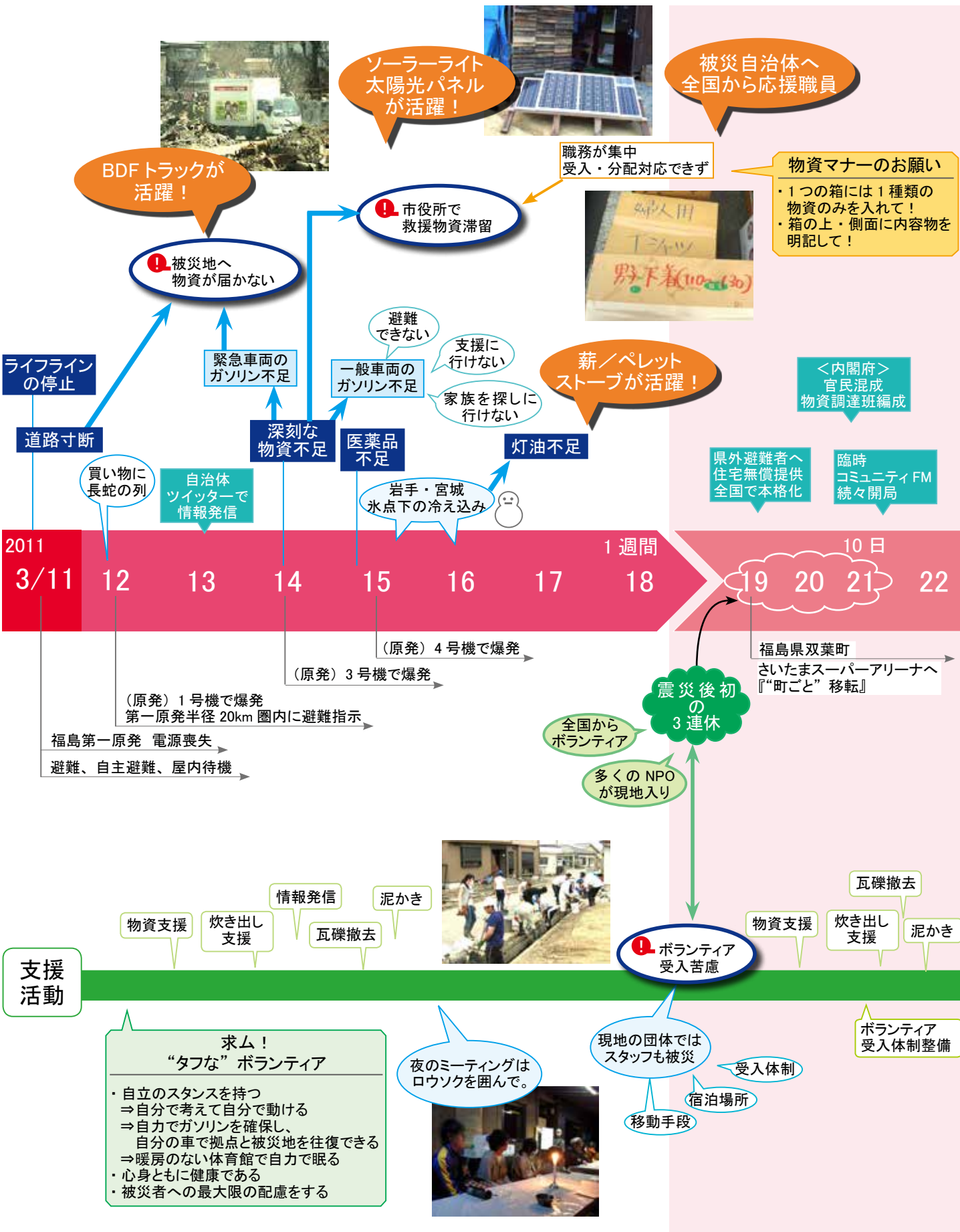
合計掲載件数：102 件

■「3.11 あの時」協力者の内訳

「3.11 あの時」の作成にあたり、環境活動に関わる様々な立場の方々、全 94 名にご協力いただきました。中には複数回にわたってご協力いただいた方もおり、全部で 102 件のレポートが集まりました。ここでは、協力者の所属と分野の内訳をご紹介します。



時間軸で見る東日本大震災 2011 年 3 月 11 日からの 1 カ月間



東日本大震災 2011 年 3 月 11 日からの 1 年間



支援現場で 何が起きたか

東日本大震災により日本中が大混乱となりました。情報が錯綜し、必要な場所に必要な支援が届けることが難しい状況でした。そして、広域的な被害に復旧・復興作業が長期化していく中で、今もなお被災者は不安を抱えています。「支援」ページでは、課題に向き合った4つのトピックスを紹介しています。非常時の支援活動への備えを考えるきっかけになれば幸いです。



支援を 考える 4つのトピックス

避難者を笑顔にするためには...
避難者の
活力を生む
支援
→ P.10

必要な支援が必要な場所に届けるためには...
連携で広がる
支援
→ P.8

広範囲！



支援のミスマッチを起こさないためには...
支援団体と被災地
をつなげる
支援
→ P.14

被災地のことを忘れないで...
震災を忘れず、
伝える
支援
→ P.12

GW後
ボランティア
減

何できる？

「支援」ページの読み方

① 連携で広がる支援

問題 単独で広範囲の被災地を支援することは難しい。

被災地は広範囲であり、単独での支援活動には限界がありました。行政は公平な支援が求められ、行政の手が届かない部分を民間が支援しました。NPOは機動力がありますが、資金や人材不足に悩まされました。企業は資金や物資があっても、どこに物資を届けばよいかわからず、必要な支援が必要な場所に届けることができませんでした。

事例 多様な主体や他地域との連携で広がる支援

行政やNPO、企業など多様な主体がお互いの強みを活かして連携した結果、スピーディーかつスムーズに必要な支援を届けることになりました。

道の駅×農家

「東北道の駅連携会事務局」を創設している。道の駅は多岐から農産物に力を入れていて農家とのつながりもとても強い。「駅あての町」や「駅あての産物」を生かして、道の駅と農家の間で産物の流通を促進することができた。

NPO法人 東北道の駅連携会事務局 代表 菅野氏

全国の中小企業と連携

「被災地支援ネットワーク」を創設している。全国の中小企業と連携し、被災地の復興支援に力を入れている。被災地の復興支援に力を入れている。被災地の復興支援に力を入れている。

株式会社 復興支援ネットワーク 代表 菅野氏

力を合わせて機動力増

当時、被災地の復興支援に力を入れている。被災地の復興支援に力を入れている。被災地の復興支援に力を入れている。

NPO法人 復興支援ネットワーク 代表 菅野氏

② 3.11 現場の事例

②に示した問題に向き合った支援の事例を紹介しています。

吹き出し 具体的事例を「3.11 あの時」レポートから抜粋しました。

③ トピックについて発言した人数とキーワード

31名 / 94名

これまでのつながりを活かして連携 24名 (占1名)

つながりづくりの大切さを感じた 15名 (占1名)

④ もしもの未来を考える時のキーワード

②の問題解決の助けとなる事柄をキーワードとともに紹介しています。

吹き出し 具体的事例を「3.11 あの時」レポートから抜粋しました。

⑤ 「3.11 あの時」の中でトピックについて発言した人数とキーワード

「3.11 あの時」ヒアリングの中で、トピックに関連する発言をした人数と、特に発言の多かったものを2つ、発言人数とともに掲載しています。



問題

単独で広範囲の被災地を支援することは難しい

被災地域が広範囲であり、単独での支援活動には限界がありました。行政は公平な支援が求められ、行政の手の届かない部分を民間が支援しました。NPO は機動力がありますが、資金や人員不足に悩まされました。企業は資金や物資があっても、どこに物資を届ければ良いか分からず、必要な支援が必要な場所に届けることができませんでした。

事例

多様な主体や他地域との連携で広がる支援

行政や NPO、企業など多様な主体がお互いの強みを活かして連携した結果、スピーディーかつスムーズに必要な支援を届けることにつながりました。



道の駅×農家

「東北道の駅連絡会事務局」を担っている。道の駅は普段から産直に力を入れていて農家とのつながりがとても強い。1 駅あたり約 100 名いる農家会員に声をかけると相当な量の物資を集めることができた。

NPO 法人 あきた地域資源ネットワーク 鑑 啓記氏

全国の中小企業と連携

被災地を見に行き、「ここに居るものだけでは絶対になんともできないだろう」と思った。東京行きのバスに乗り、つながりのある中小企業などを訪ねて、協力を呼びかけた。こうして JASFA* が誕生した。産学官連携で支援活動に取り組んでいる。

株式会社 馬淵工業所 小野 寿光氏

* JASFA：一般社団法人持続可能で安心安全な社会をめざす新エネルギー活用推進協議会



力を合わせて機動力増

当時、遠野の風土と観光を考える連絡協議会を立ち上げたばかりだった。普段から地域づくりに関わる活動を行っていたので、このネットワークを活かし、「遠野まごころネット」（遠野被災地支援ボランティア）を設立し、災害支援活動を行っている。多くの団体と連携することで機動力が増した。

NPO 法人 遠野エコネット 千葉 和氏



日頃からネットワークを作っておくことが非常時に役立つ

東日本大震災では行政や NPO、企業などの連携が、多様な支援につながりました。これからの備えとして、非常時にも機能するネットワークの構築に向けた動きが生まれています。

県外とつながる

県外の団体とのつながりも作っておくべきだと感じた。震災後はつながり作りのために、他県で行われる中間支援組織の集まりに積極的に顔を出すようにしている。

NPO 法人 秋田県南 NPO センター 奥 ちひろ氏



日頃の交流がセーフティネットになる

地域外との交流・連携がセーフティネットとして十分に機能しうものだと当事者になり強く感じた。

NPO 法人 ザ・ピープル 吉田 恵美子氏



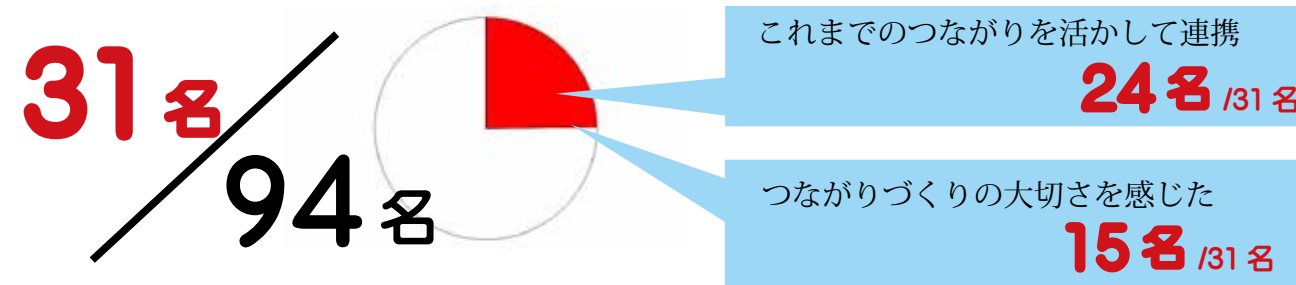
周りの人の特技を知っておく

中間支援組織として、どんな団体がどこでどのような役割を担っているかを整理し把握する必要があると考えている。全体を把握すれば、不足し補わなければならない部分が課題として見えてくる。そうした準備をしておかないと、このような大規模災害が起きた時に皆さんに支援の手が届かない。

NPO 法人 山形の公益活動を応援する会・アミル 齋藤 和人氏



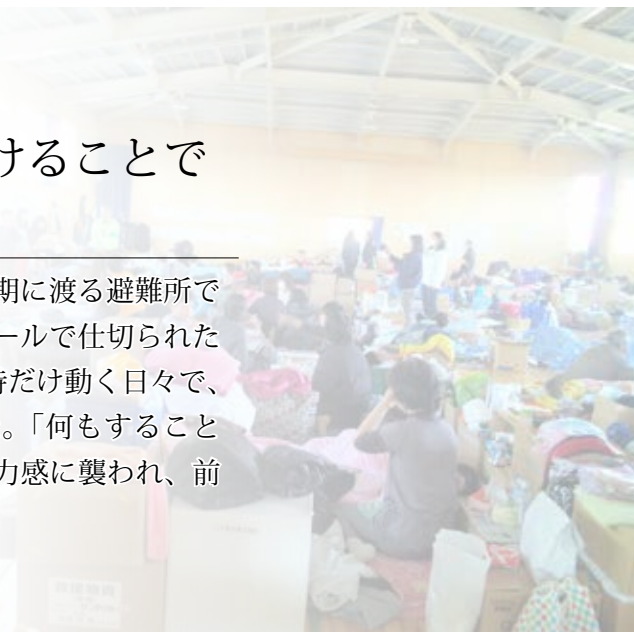
トピックについて発言した人数とキーワード



問題

「支援される側」に居続けることで生まれる無力感

着の身着のまま避難した人々は、長期に渡る避難所での生活を余儀なくされました。ダンボールで仕切られた狭い空間で1日を過ごし、配給に並ぶ時だけ動く日々で、避難者は一様に暗い顔をしていました。「何もすることがない」生活が続くことで、不安と無力感に襲われ、前を向く気力を失われていきました。



事例

被災者が活躍できる場を提供

炊き出しなどの避難所運営を被災者と支援者が協力して行うことで、被災者が「必要とされている」「自分に役割がある」と感じ、避難者に笑顔が戻りました。他にも被災者が活躍できる機会としてぬいぐるみなどを作る手仕事が生れました。

「料理のプロ」主婦におまかせ

避難所には主婦という料理のプロがいる。そこで、炊き出しの調理の手伝いをお願いすることにした。すると皆さんの顔が生き生きと変わっていくのが分かった。



NPO 法人 ザ・ピープル 吉田恵美子氏

手仕事による癒し

避難所に届いたタオルを縫って雑巾を作ってもらい、販売し、縫ってもらった人に報酬をお渡しする「げんき雑巾」を企画した。皆さんすごく楽しんで縫ってくださっている。手を動かすことは本当に癒しになると思う。



ACT53 仙台 木下 牧子氏、岡 菜実氏



震災から一緒に立ち上がる仲間

一方的な支援だけではなく、一緒に活動することで支え合える関係が生まれます。被災者に対して震災から立ち上がる手助けをすることも一つの支援の形です。



友達のような関係を

現場の方たちとは「支援者」と「支援を受け人」ではなく、お友達のような関係でありたいと思っていますので、肩肘張らず、肩に力を入れすぎず、これからも楽しく活動に携わっていきたい。

NPO 法人 まちづくり政策フォーラム 足立 千佳子氏

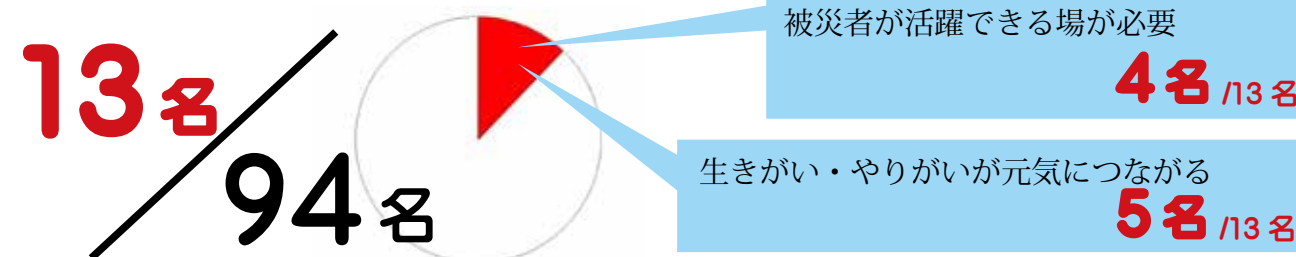
被災者から働き手を募集

緊急時の支援は、もっと協働的な支援を促す方法があるのではないだろうか。一緒にご飯を作る人を避難している方の中から募集して働いてもらう、動きたい人がいるなら募集する。そのように避難者も参加する余地があったら、もっと精神的に健全に過ごせたら。

コミュニティファシリテーション研究所 廣水 乃生氏



トピックについて発言した人数とキーワード



問題

復旧・復興活動が長期化する中で
支援が無くなる恐怖感

2011年5月の大型連休を境に、被災地を訪れるボランティアやニュース報道が減少しました。その頃から、被災地のことを忘れられてしまうのではないかと、風化を恐れる声が出てきました。

事例

「忘れない」「忘れないで」を伝える活動

被災者に対し「忘れない」ことを伝えるため、被災地に思いを馳せる催しを定期的に行う取組が各地に広がっています。また、被災地への関心を持ち続けてもらうために、被災地の現状を発信する取組も行われています。



キャンドルを通じて想いを馳せる

キャンドルに火を灯すことで震災を忘れないことを形にできるのではとひらめいた。SNSを使って表現することで、被災者と支援者をつなぐ取組を始めた。後に「ともしびプロジェクト」の名がついた。

一般社団法人 Nr.12 杉浦 恵一氏

現地の今を知ってほしい

今起きていることや福島にある複雑な思いが伝わっていないと感じた。きちんと福島の声を発信していく事業に取り組むため「女子の暮らしの研究所」を立ち上げた。福島の話をするきっかけにするために、会津木綿を使った「ふくいろピアス」を作成・販売するなど、福島の今を伝える事業をしている。

女子の暮らしの研究所 株式会社 GIRLSLIFELABO 日塔 マキ氏



伝え続けることが大切

長期的な復旧・復興活動に立ち向かう被災者にとって、皆さんの応援が心の支えとなり、前に進む活力につながります。被災者の「忘れないで欲しい」声と支援者の「忘れないで」声をお互いに伝え続けるために「伝える」を形にする取組が生まれています。



3.11 を伝え続ける商品

震災はどんどん風化してしまう。そこで、宮城のお米で作った特別酒「3.11 未来へつなぐバトン」を作った。売上の一部は被災した子ども達への支援基金「ハタチ基金」に寄付している。この取組を20年続けることが決定した。こうした企業活動を通じて、多くのお客様に周知していくミッションがあると思っている。

株式会社 一ノ蔵 山田 好恵氏

「忘れない」を体現すること

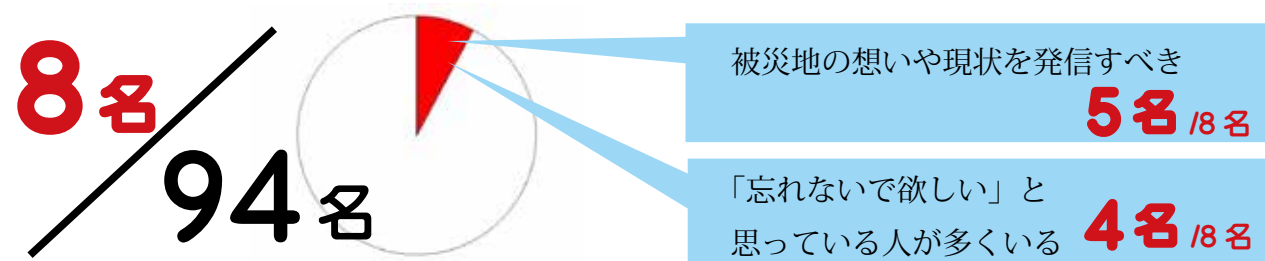
石巻の方に「来てくれるだけで、被災地を気にかけていること、震災を忘れないことを体現してくれている」と言われた。被災地を忘れないで欲しいと思っている東北の人が大勢いる中、「忘れないよ」を伝えるだけで心の支えになり、元気づけることにつながっていく。これからも石巻に行き続けたい。



個人 有坂 美紀氏



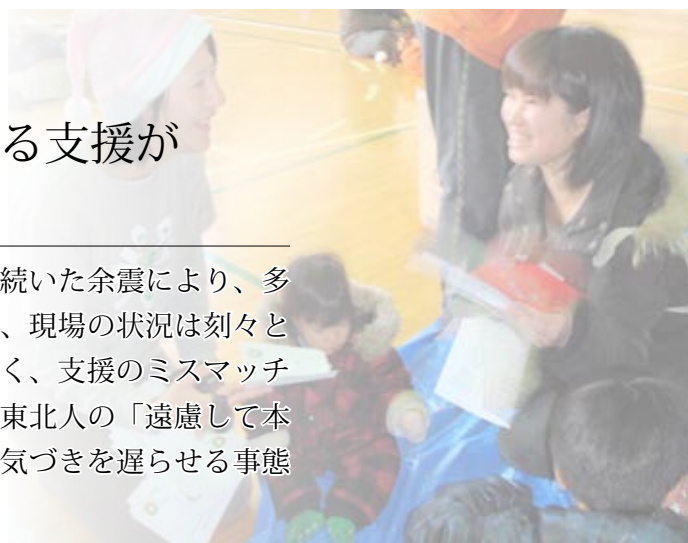
トピックについて発言した人数とキーワード



問題

被災者が必要としている支援が把握できない

大地震、大津波、火災、断続的に続いた余震により、多くの支援を必要とした被災地ですが、現場の状況は刻々と変わり「必要な支援」の把握が難しく、支援のミスマッチが大きな課題となりました。また、東北人の「遠慮して本音をいわない」気質が必要な支援の気づきを遅らせる事態を招きました。



事例

支援をする人と受ける人をつなぐ

支援者ができる支援と被災者が必要としている支援、そして東北ならではの言葉や機微を理解する人が、仲介役として活躍しました。

佐賀県の気持ちを東北へ

私は仙台から佐賀県に避難していた。
佐賀県の方たちは支援したい想いは強いが、東北の状況は分からない。そこで、佐賀県の方の支援したい気持ちも分かり、東北の方の大変な気持ちも分かる私が仲介役を担った。

i-くさのねプロジェクト 砂子 啓子氏



ボランティアとおばあちゃんの通訳

ずっと地元にいるおばあちゃんたちは東京や関西の言葉がわからないと言う。地域外と地元の方を通訳する点でも私がいる意味があるのかなと思う。
現地の状況をボランティアに伝えることも大事である。

NPO 法人 まちづくり政策フォーラム 足立 千佳子氏



被災者と支援する人、両方の理解者

被災者の想いと、支援者の被災地のために支援をしたいと思う善意、両者を理解している人が仲介役を担うことで、必要な支援を必要な場所に届ける支援へとつながります。

当事者目線が大切

さまざまなボランティアセンターやボランティアグループを見て、当事者目線であることが絶対に重要だと感じた。ReRootsのボランティアには相手の立場、目線に立って活動するよう伝えている。

ReRoots 広瀬 剛史氏



みんなの声を橋渡し

被災者はいろいろな大変な事、不満、不都合を抱えているがそれを吐き出すところがない。私たちのような第三者が入って整理することによって、市民の声を行政に届けていく橋渡しをしていけたらと思っている。

NPO 法人 いしのまき環境ネット 川村 久美氏



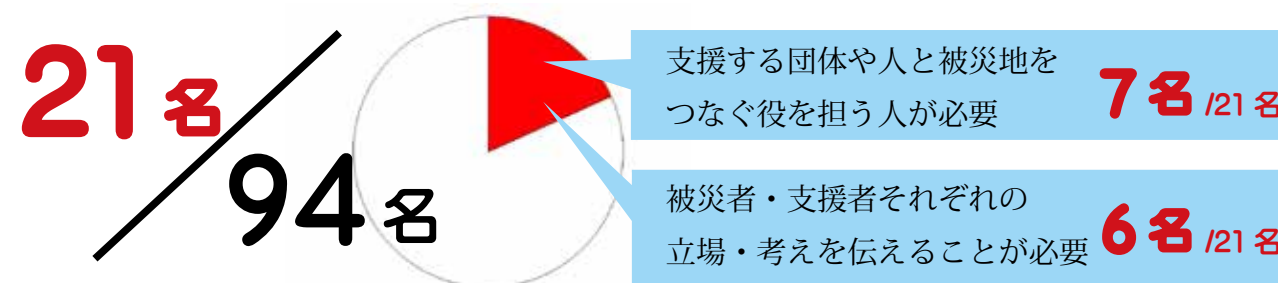
聞く→伝える人が必要

現地の方は簡単には「〇〇が欲しい」「もう〇〇は必要ない」と主張できないと思うので、そこは第三者のボランティアや地域のリーダーの力が必要だと感じた。

オフィス e 鈴木 悦子氏



トピックについて発言した人数とキーワード



再生可能エネルギーとは

再生可能エネルギーとは、エネルギー源として持続的に利用することができると認められるものであり、太陽光、風力、水力、地熱、太陽熱、大気中の熱等の自然界に存する熱、バイオマスがそれにあたります。資源が枯渇せず繰り返し使え、発電時や熱利用時に地球温暖化の原因となる二酸化炭素をほとんど排出しない優れたエネルギーです。

太陽光



バイオマス



風力



水力



地熱



EPO 東北の 取組

「3.11 あの時」ヒアリングの中で、多くの方から防災の観点による再生可能エネルギーの可能性について語られました。

東日本大震災の影響で長期間ライフラインが止まった際、多くの人々がエネルギー不足によりいつも通りの生活が送れなくなりました。そんな中でも再生可能エネルギーを上手く活用し、普段とあまり変わらない生活を送る人がいました。さらに、復旧作業に再生可能エネルギーを活用する動きも見られました。

東日本大震災で、広域的かつ長期間ライフラインが停止したことを契機に、エネルギーの仕組みは大規模集中型だけでなく、小規模分散型の仕組みも展開し、ライフラインが止まった際でも必要最低限のエネルギーを確保できることの重要性が見直されました。

EPO 東北では再生可能エネルギーの可能性を探るため、東北各県の関連団体を招聘し、再生可能エネルギーを主題とする交流会を開催してきました。その中で、再生可能エネルギーは地域資源から得られるエネルギーであることから、エネルギー源の多様化と分散化を図ることができ、地球温暖化対策などの環境面だけでなく、供給リスクの軽減という防災の側面を持つことが注目されました。

東北の学びを全国で活かしてもらうべく、他地域のEPOと連携し、東日本大震災の事例や交流会の議論から見てきた再生可能エネルギーの可能性を東北外の関連団体と議論する場も設けてきました。

これからも、東日本大震災から見てきた再生可能エネルギーの可能性について議論し、全国に向けて発信していきたいと考えています。



コラム

デュアル・エネルギー・パス

新妻 弘明

このたびの震災で、我々は高度で巨大なシステムが相互依存する現代文明の脆さと我々が身の回りにあるエネルギーを利用すること、できることの大切さ、有り難さを身をもって体験した。震災の10年ほど前からエネルギーを自給することの意味と意義を研究してきた私は、自らも被災し、またいくつかの被災地を訪れ、いろいろな情報に接するうちにデュアル・エネルギー・パスという概念に思い至った。

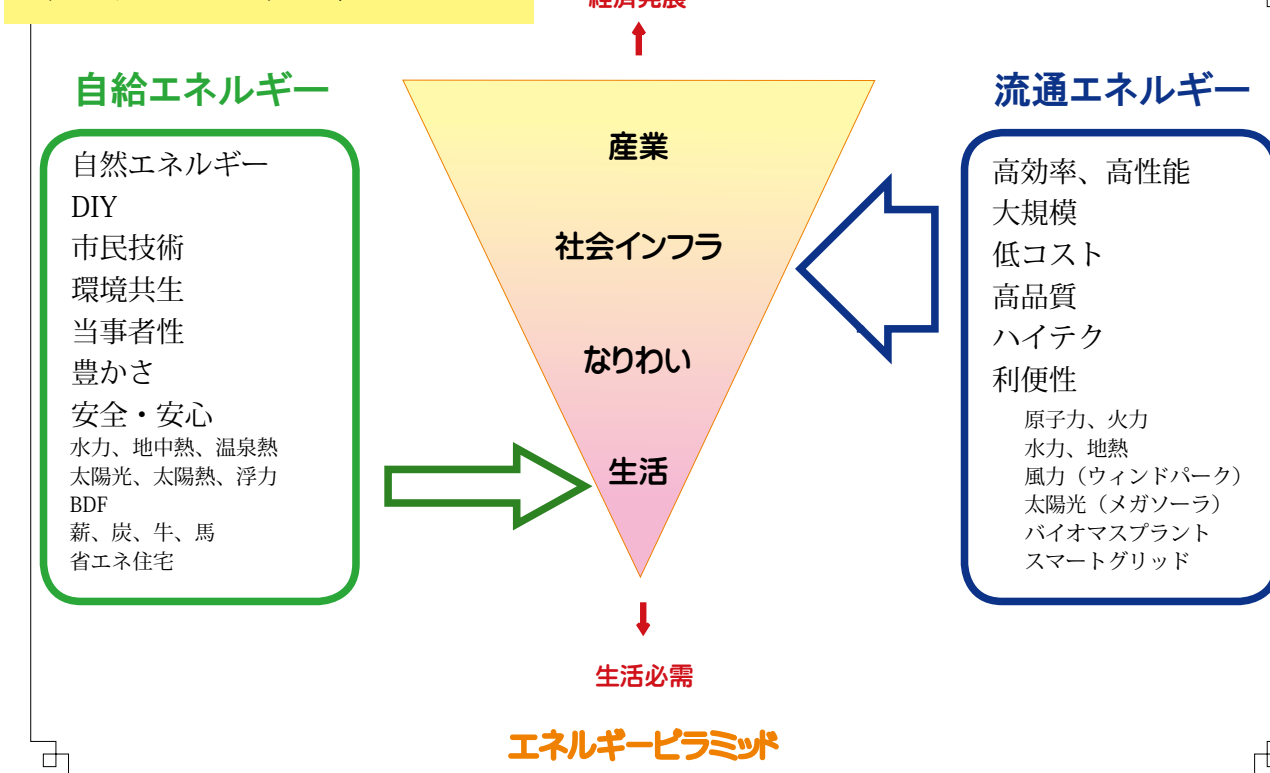
我々のエネルギー消費は我々が生活するのに必要不可欠なエネルギー、社会生活を営むのに必要なエネルギー、交通・商店街等社会インフラに必要なエネルギー、産業に必要なエネルギーと次第に大きくなり、これはエネルギーピラミッドと言われている。現代社会ではこれらすべてをまかなうため、高効率・高性能・大規模なエネルギーシステムが低コストかつ高品質なエネルギーを「流通エネルギー」として供給している。この度の震災では、この大規模エネルギーシステムのほとんどが機能停止し、地域の産業はもとより我々の生活も困難なものとなった。

このような「流通エネルギー」のみに依存する社会のしくみに対して、我々の生活に必要な不可欠な分だけでも自給し、エネルギーのパス（筋道）を二つにしようというのが「デュアル・エネルギー・パス」の考え方である（下図）。

この「自給エネルギー」のパスは「流通エネルギー」のパスとは価値基準を異にし、地域にあるエネルギーを自らの手で利活用することによる安全・安心と豊かさの創出に重点が置かれる。生活に必要な不可欠なエネルギーは今回の震災の経験からみてもそれほど大きなものではない。そして地域にあるエネルギーの多くは再生可能エネルギーである。コストと供給量が重んじられる「流通エネルギー」では生き残りにくい、地域の多種多様な未利用エネルギーの活用の、もう一つの重大な意味をこのたびの震災は教えてくれたのである。

地域のエネルギーを日常的に利活用することは、温暖化防止ばかりではなく2次自然の再生とそれにとりも生物多様性の復活、地域雇用の創出と活性化等、地域に多様な波及効果をもたらす。そして、このたびのような災害時にはその真価を発揮することになるのである。

デュアル・エネルギー・パス



非常時に活躍した エネルギー

発災直後から電気やガスなどのライフラインが停止し、明かりを照らすことも暖をとることもできず、現代社会は外からのエネルギーに頼った生活を送っているのだと誰もが実感しました。また、ガソリンの流通機能が低下し、車両や重機を動かせないため、支援・復旧の遅れにつながりました。「エネルギー」のページでは、深刻なエネルギー不足に悩まされる中で活躍した再生可能エネルギーに関する2つのトピックスを紹介しています。エネルギーのあり方を考えるきっかけになれば幸いです。



エネルギー を考える 2つのトピックス



「エネルギー」ページの読み方

① エネルギー 地域自給できるエネルギー

問題 ライフラインが止まり、いつもの生活が送れない

発災直後から電気やガスなどのライフラインが停止し、明かりを照らすことも、温かい料理を食べることもできなくなりました。寒い日が続く中、暖をとることもできず、お風呂に入って身体を温めることもできませんでした。

事例 地産地消エネルギーが活躍

ライフラインが止まってしまった被災地では再生可能エネルギーが活躍しました。また、被災前から再生可能エネルギーを活用していた家庭では、ライフラインが止まっても、暖はももちろん、煮炊きなどもでき、普段と変わらない生活を送れました。

太陽光パネルで明かりを確保

自宅に太陽光パネルによる自立電源を持っている、太陽光パネルで発電した電気を「パワー」に活用して、お風呂で湯を温めたり、照明を確保したり、避難所に太陽光パネルを設置することで電気の供給ができた。食料倉庫を物らず明かりなどを確保することができた。

薪ストーブが大活躍

薪の備えがあったので、暖房の他、料理や温湯にも使うことができた。避難の期間の中で薪ストーブの良に気がついた。自分で採取したエネルギーを自分で使えるというのは、何物にも代えがたいものがあった。薪ストーブ、自分で自給している暖房が注目のポイント。

②

今後 非常時にも対応できるエネルギーを地域でつくる

被災後、地域で自給できるエネルギーが見直されています。再生可能エネルギーの認知度向上やエネルギーの地産地消の仕組みづくりを目指す動きが生まれました。

自然エネルギーを使わなくては！

私たちは震災によって電気がないという生活を送る上で貴重な経験をした。あの経験を未来の生活へ活かすために、「自然エネルギーを使わなくてはならない」と思うレベルまで人々の意識を変えていきたい。

ソーラーワールド株式会社 西内 賢二氏

避難所にエネルギー完備を

震災時に最低限生活できるように、地域に「エネルギーの壁」を作る必要があると考え、燃料電池や発電機が学校や公民館など地域にあれば、避難のインフラに何かが役立つと、自立運転ができる。

東北大学大学院 坪田 俊彦氏

震災後に自分たちで発電所を建設

発電所の建設に取り組みながら、自分たちの電気を確保。よそから入った業者ではなく、自分たちでやったのが良かった。自立運転ができるので、被災地に備えて300w位の発電所を村にたくさん作られたらいいと思う。

だらす工務 棚村 茂氏

⑤ トピックについて発言した人数とキーワード

トピック	発言した人数	キーワード
① トピック	23名 / 94名	地域自給できるエネルギーへの切り替え、導入した
② トピック	6名 / 11名	持続可能な社会を創出したエネルギーの普及を促すべき

①トピック

「エネルギー」ページでは2つのトピックスを取り上げています。

②震災の影響で生じたエネルギー問題

③ 3.11 現場の事例

②に示した問題の解決につながった再生可能エネルギーと、そのエネルギーの活用事例を紹介しています。

吹き出し

具体的事例を「3.11 あの時」レポートから抜粋しました。

④もしもの未来のためにすべきこと

震災時に再生可能エネルギーが活躍した経験から生まれた、エネルギーに対する考えを紹介しています。

吹き出し

具体的事例を「3.11 あの時」レポートから抜粋しました。

⑤「3.11 あの時」の中でトピックについて発言した人数とキーワード

「3.11 あの時」ヒアリングの中で、トピックに関連する発言をした人数と、特に発言の多かったものを2つ、発言人数とともに掲載しています。



問題

ライフラインが止まり、
いつもの生活が送れない

発災直後から電気やガスなどのライフラインが停止し、明かりを照らすことも、温かい料理を食べることもできなくなりました。寒い日が続く中、暖をとることもできず、お風呂に入って身体を洗うこともできませんでした。

事例

地産地消エネルギーが活躍

ライフラインが止まってしまった被災地では再生可能エネルギーが活躍しました。また、震災前から再生可能エネルギーを活用していた家庭では、ライフラインが止まっても、暖はもちろん、煮炊きなどもでき、普段と変わらない生活を送れました。



太陽光パネルで明かりを確保

自宅に太陽光パネルによる自立電源を持っている。太陽光パネルで発電した電気をバッテリーに充電していたので 30 分ほどで電気が復旧した。

避難所に太陽光パネルを設置することで電気の供給源ができ、資材倉庫を照らす明かりなどを確保することができた。

ソーラーワールド株式会社 武内 賢二氏

薪ストーブが大活躍

薪の備えがあったので、暖房の他、料理や湯沸しにも使うことができた。停電の暗闇の中で薪ストーブの炎に心が癒された。自分で採取したエネルギーを自分で使えるということは、何物にも代えがたいものがあった。常日頃、自分で自給している強みが出たと思う。



東北大学大学院 新妻 弘明氏

今後

非常時にも対応できる
エネルギーを地域でつくる

震災後、地域で自給できるエネルギーが見直されています。再生可能エネルギーの認知度向上やエネルギーの地産地消の仕組みづくりを目指す取組が生まれました。



自然エネルギーを使わなくては！

私たちは震災によって電気がないと何もできないという生きる上で貴重な経験をした。あの経験を未来の生活へ活かすために、「自然エネルギーを使わなくてはならない！」と思うレベルまで人々の意識を変えていきたい。

ソーラーワールド株式会社 武内 賢二氏

避難所にエネルギー完備を

非常時に最低限生き延びられるように、地元で「エネルギーの駅」を作る必要があると考える。燃料電池や充電器が学校や公民館など地域にあれば、基幹のインフラに何かが起こったとき、自立運転ができる。



東北大学大学院 中田 俊彦氏

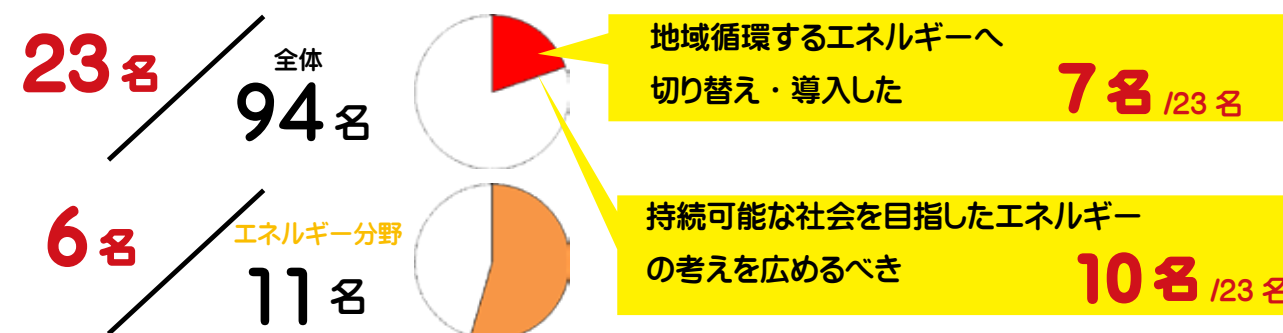
震災後に自分たちで発電所を建設

発電所の建設に取り組んでから、自分が作った電気だと思う。よそから入った業者ではなく、自分たちでやったのが良かった。自立運転ができるので、非常時に備えて 50kw 位の発電所を村にたくさん作れたら良いと思う。



だらすこ工房 畑村 茂氏

トピックについて発言した人数とキーワード



問題

物流停止と燃料不足で 支援・復旧活動が停滞

地震によって道路が寸断したため、ガソリンの流通が長期間停止し、ガソリンを買いに行っても10Lまでと制限されるなどガソリンの確保が困難な状況になりました。ガソリン不足のため、車で支援に向かうことができず、重機も動かせないため、支援・復旧の遅れにつながりました。

事例

BDF[※]で動く車や重機が復旧・支援活動で活躍

ガソリンなどの燃料不足で切迫した状況の中、BDF（Bio Diesel Fuel：バイオディーゼル燃料）で動く車両や重機が活躍しました。

BDFは地域内で比較的調達しやすい植物油や廃食油で作られるため、材料と装置があれば震災直後でも精製することができました。震災以前よりBDF精製事業を行っていた企業・団体はガソリン不足を補うため、地域から材料を集め、BDF精製に取り組みました。BDFで動く車両や重機は一刻を争う支援・復旧の現場で支援物資の輸送や炊き出し、道路整備などに活用されました。

※ BDF（Bio Diesel Fuel：バイオディーゼル燃料）とは
植物油や廃食油などからできる燃料です。軽油の代わりとなり、自動車や重機などのディーゼル車に利用されます。大気中の二酸化炭素を吸収した植物から作るため、全体で見るともと大気中に存在した以上の二酸化炭素を増やさないとされています。環境にやさしい資源循環型燃料として注目されています。



自社で BDF を精製し燃料確保

いわて生協は自社の施設で BDF 精製を行えたため、多くの支援者が燃料問題で頭を悩ませる中、被災地での移動販売や炊き出しのトラックを走らせることができ、支援活動で大きな力を発揮することができた。

社会福祉法人 自立更生会盛岡アビリティセンター 菊池 満氏



今後

地域で作れる BDF を広める

BDFは原料の確保、品質の確保、コストの削減など課題も多くあり、まだ広く市民に認知されているエネルギーではありません。しかし、今回の震災で、地域内で精製できるBDFの活用注目が集まりました。この活躍をきっかけにBDFを広める動きが活発になっています。

BDF の活用先

廃棄物削減の意味でも、植物油のように大量に輸入をしていて商品化もしている資源の活用は重要だ。BDFは最近のエンジンには使えないと言われていて、なんとなく斜陽な見方をされているが、農業用として十分使えるし、発電機や建設機械にも適合する。



独立行政法人 東北農業研究センター 野中 章久氏

安定供給と品質確保

今後の課題は安定的な廃食油の調達と品質確保だ。企業努力とともに、この震災で人々が考えるきっかけになってくれればと思っている。市民が自由に廃食油を持ち込める回収所を設置し、町内会や婦人会などの協力の輪も広がってきた。



社会福祉法人 睦会 障害者支援施設 遠野コロニー 松田 賢雄氏

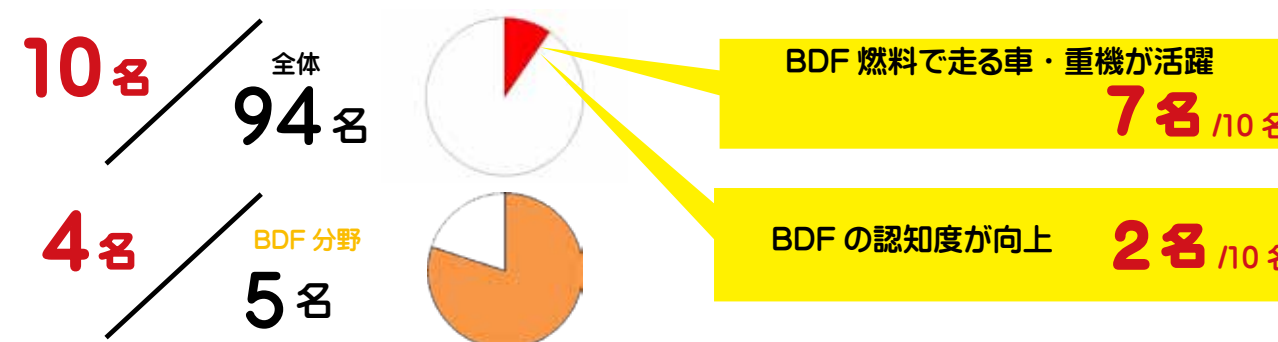
積極的に教育現場へ

BDFの認知度が低い事が課題だ。そのため、県より宮城県環境教育リーダーの委嘱を受け、依頼があれば積極的に教育現場で環境出前講座を行っている。また、インターンや地域の団体の視察の受け入れを積極的に行っている。



有限会社 千田清掃 千田 信良氏

トピックについて発言した人数とキーワード



ESD とは？

ESD とは「持続可能な開発のための教育」(Education for Sustainable Development) の略称です。環境や食料、貧困、紛争、人権など、世界にはさまざまな社会問題があり、複雑に絡み合っています。地球のすべての生物が遠い未来までその営みを続けていくため、一人ひとりがこれらの社会問題を地域や自分の問題として捉え、総合的に考える必要があります。多様な文化や自然などに触れることで、それぞれの分野のつながりに気づき、毎日のあり方を変えていく。そのための学びの場、行動する人づくりが ESD です。



ESD の視点から見る伝承

EPO 東北では、ESD 教育につながる数多くの素材の中から「伝承」に着目しました。伝承とは、古くからの慣習や教訓、出来事などを後世に伝えるものです。伝聞や石碑、文献などさまざまな形で残されています。

環境教育の視点で伝承を読み解くと、自然の向き合い方や過去の災害について知ることができ、地域とともに生きるためのヒントをたくさん得ることができます。震災をきっかけに、地域の自然特性や防災の知恵などを後世に伝える取組が活発に行われるようになりました。



EPO 東北の取組

「3.11 あの時」ヒアリングの中で、多くの方から「伝承」というキーワードが出てきました。先人たちは自然と共存する術や、自然災害から身を守る知恵を伝承し、現代に伝えてきました。それらの知恵や文化は、自然豊かな東北の地域で生きていく上で重要な情報だと考えられます。実際に東日本大震災では、地域に残る伝承をしっかりと受け継ぎ、先人たちからの教訓を生かして被害を免れた地域もありました。

EPO 東北では、地域の自然特性やそれに適応する知恵を伝える「伝承」をまさに東北の ESD だと考え、次世代へ確かに伝える糸口を探るため、伝承を調査している方々や東日本大震災の教訓を後世に残そうとしている NPO 団体、教訓を伝える取組を行っているローカルメディア関係者を招聘し、議論を重ねてきました。伝承から環境や地域、防災について考える ESD の取組を東北から全国に向けて発信していきたいと考えています。



伝承× ESD から見える 将来への備え

東日本大震災では、非常時に起きるであろう問題と解決方法を「伝承」によって知っていたため、減災につながった事例がありました。

「伝承× ESD」ページでは、東日本大震災から得られた課題や教訓を後世に活かしてもらうことを目的に生まれた「伝える」取組に関して3つのトピックスで紹介しています。自分の住む地域に伝わる伝承を知り、そして、事前防災について考え、取り組むきっかけになれば幸いです。



伝承× ESD を考える 3つのトピックス

伝

地域の特性を伝える
 → P.30



え

後世に東日本大震災を
 伝える → P.28



る



災害時の生活を伝える
 → P.32



「伝承× ESD」ページの読み方



①トピックス

伝承× ESD のページでは、3つのトピックスを取り上げています。

②伝承× ESD に関わる教訓

東日本大震災を経験して見えてきた「伝える」取組についての教訓を詳しく説明しています。

吹き出し

具体的事例を「3.11 あの時」レポートから抜粋し、掲載しました。

③教訓の補足

②に付随する情報を紹介しています。

④教訓を活かすための取組

教訓を活かすために行われている「伝える」取組を紹介しています。

吹き出し

具体的事例を「3.11 あの時」レポートから抜粋しました。

⑤「3.11 あの時」の中でトピックについて発言した人数とキーワード

「3.11 あの時」ヒアリングの中で、トピックに関連する発言をした人数と、特に発言の多かったものを2つ、発言人数とともに掲載しています。



教訓

過去の災害を学び、 防災・減災につなげる

過去に起きた災害を伝える石碑や文献に目を向けると、地域の自然の特性や災害の歴史、先人たちの経験などを知ることができます。

三陸地方に伝わる「津波てんでんこ」は「津波が起きたら各自てんでばらばらになって逃げろ」という教えです。岩手県釜石市内の小中学校では、この教えに基づき津波からの避難訓練を8年間重ねてきました。その結果、子どもたちは東日本大震災発災後、教えを守ってすぐに避難し、市内の児童・生徒約3千人の内、99.8%が助かりました。

地域に残る伝承から過去の災害を知り、これからの非常時への備えに生かしていくことが大切です。



個人 後藤 一磨氏

ご先祖様に学ぶ

震災直後、高台調査なども行った。その中で、縄文遺跡が今回の津波を免れて残っていることが分かった。かつてここで暮らしていたご先祖様は、津波の被害を受けることなく安全に暮らせる場所をきちんと知っていたのだ。

補足

過去の災害を伝え残していた例

石碑

大津波記念碑

岩手県宮古市重茂の姉崎地区では過去の津波被害からの警告を刻んだ大津波記念碑の教えを守り建物被害0件でした。

神社

浪分神社

仙台市若林区霞目にある浪分神社は、過去の大津波で神社近くまで襲われたものの、社前で波が引いたことが由来とされています。東日本大震災でも津波は神社まで到達しませんでした。

口伝

津波てんでんこ

1990年に開催された第1回「全国沿岸市町村津波サミット」において生まれた標語「津波てんでんこ」は津波が起きた際の逃げ方を伝えるものです。

取組

東日本大震災の教訓を後世で活かすために

将来起こるかもしれない災害への備えとして、震災から得られた教訓を後世の人々に活かしてもらえるよう、教訓を伝え続けるための仕組みづくりや取組が生まれています。

教育を通じて震災の教訓を将来へ

普通の仕組みの中で生きる日々が続き、いつか日本中が震災を忘れてしまうだろう。今回得た多くの気づきをいつも心に思っていて、子ども達を教育して、次の未来のために生き残る日本を創っていかなければいけない。

宝来館 岩崎 昭子氏



大事なものは伝え続けること

みやぎ生協文化会館 Withの中に「東日本大震災学習・資料室」を作った。忘れない事、伝える事、伝え続ける事、つながりをきらない事、そして情報を発信し続ける事、これが今は一番大事な事だと思っている。

みやぎ生活協同組合 齋藤 昭子氏



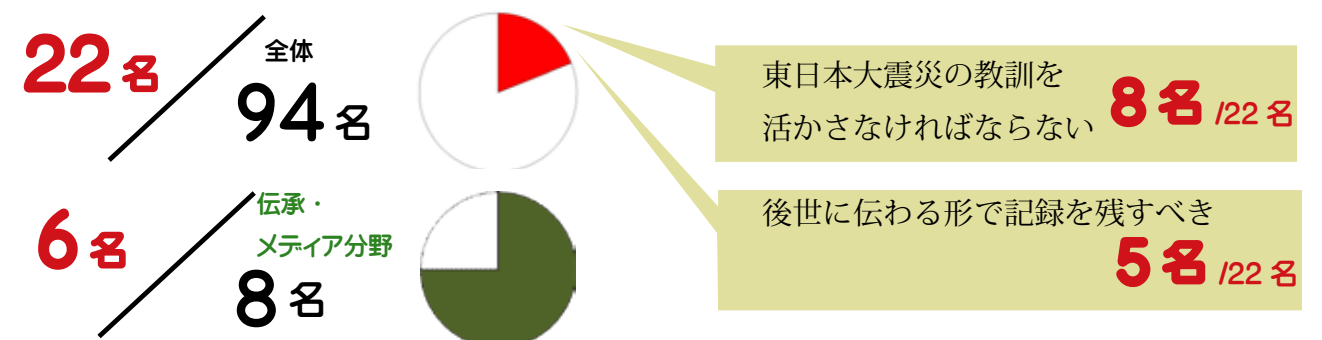
写真で震災以前の暮らしを伝える

大事だったのは壊れる前の町を残すことだった。写真を見直した時に、我々が「語る」ことが必要であると思う。皆が楽しい暮らしをしていたことが伝わらないと、私たちが何を失い、何を破壊されたのか伝えることができない。

個人 山内 宏泰氏



トピックについて発言した人数とキーワード



教訓

地域特性を知ることが 安全な避難の一助になる

例えば津波被害が予想される場合、すぐに高台などの高い場所に避難することが必要です。東日本大震災では津波が起きた際、地域の特性をよく知る人は、津波が届かない安全な高い場所、そこにたどり着く避難経路を把握していたため、迅速な避難ができました。

非常時に自分の身を守るためには、生活している地域の過去に起きた災害の情報や、津波が来た時に逃げるための高い場所や土砂災害危険箇所など地域特性に対して理解を深めておくことが大切です。



地名からの学び

地名は土地の特徴が示された先人たちのメッセージであったのに、それらを見捨てて開発を進めてしまった。昔の人たちは自然と自分たちの境界線をきちんと保っていた。自然は変わらない。人間や社会が変わったことを見つめ直し、自分たちの生き方はこれでいいのかと考えなければいけないと思う。

NPO 法人 あおもり NPO サポートセンター 三澤 章氏



地名が伝える先人の声

地名には、自然災害で土地が壊されたこと、洪水で泣いたこと、泣かされたことが声なき声として伝えられている。災害は忘れた頃にやってくる。地名は、まさに先人から受け継いだ大いなる宝物だと思っている。

宮城県地名研究会 太宰 幸子氏



補足

津波から避難するためのチェックリスト

- ☐ 津波が来た時に逃げるべき高い場所を知っている。
- ☐ 土砂災害危険箇所を知っている。
- ☐ 3つ以上の避難経路を知っている。
- ☐ 避難場所を知っている。
- ☐ 古い建物やブロック塀など落下物の恐れがある場所を知っている。
- ☐ 避難経路に津波の流れが早くなるような狭い道がないことを知っている。
- ☐ 氾濫の恐れがある河川の場所を知っている。



取組

防災視点で地域を見直す

東日本大震災をきっかけに、地域の特性を踏まえた防災教育が見直されています。各地域の災害の歴史や防災視点で地域を伝える動きが生まれています。

防災意識を持つ

どのような津波が来るのかは分からないのだから、想定内、想定外は関係ないのだ。避難路や避難所が活かされるような防災意識をすべての人が身につけなければいけないと思う。

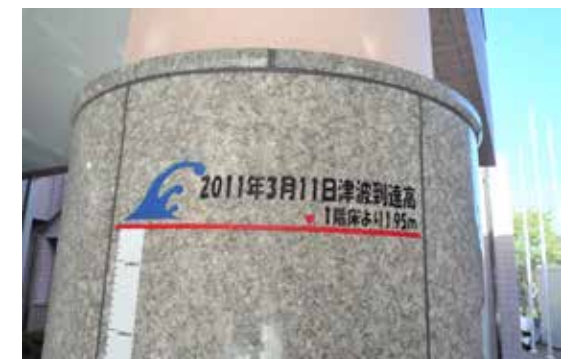
だらすこ工房 大澤 継弥氏



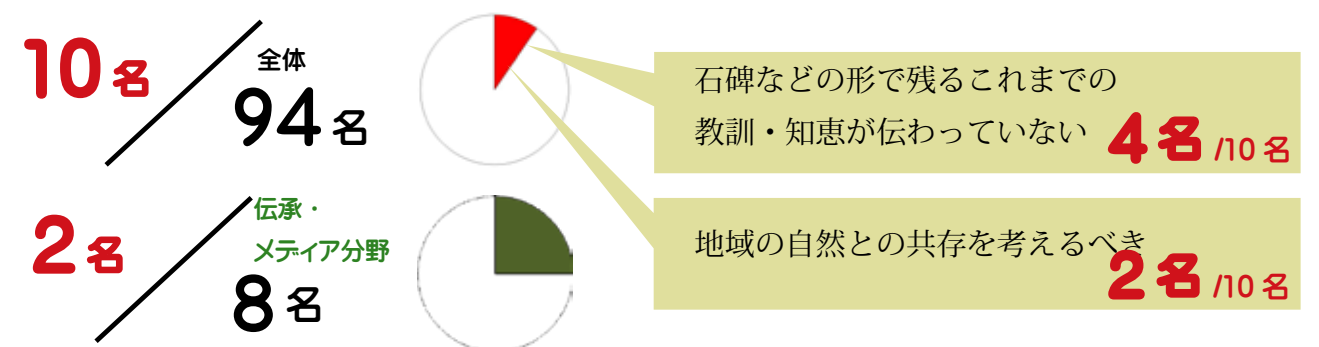
地域学習が大切

防災教育において逃げることは大切だが、そのためには地域の自然条件や社会条件をしっかりと理解する学習が必要である。

宮城教育大学 小金澤 孝昭氏



トピックについて発言した人数とキーワード



教訓

災害時の生活を想定した備えが大切

発災直後からライフラインが停止し、温かい料理を食べることも、お風呂に入って身体を洗うこともできず、今まで当たり前を送っていた生活ができなくなりました。

そんな中で被災者は、洗い物の水の節約のためお皿にラップを敷いて食事をする、電気の代わりにキャンドルを灯すなど、ライフラインが回復するまで工夫を凝らして生活を送っていました。

事前に防災グッズを準備していたため、不便ではありましたが、切り抜けることができた例もありました。災害時の生活を知り、準備しておくことが大切です。



生活に工夫を

自宅では1ヵ月間電気がストップしたが、プロパンガスだったため簡易コンロを使用する事ができた。当時はとても寒かったので水を節約しながらお湯を沸かし、ペットボトルにお湯を入れて暖をとった。電気がストップしたので、冷蔵庫の食材の始末をしなければいけないと思い、保存していた肉は全部調理することにした。濃い目の味付けにして常温で長持ちするよう、佃煮などに調理し保存した。



個人 菊地 ひろ子氏

補足

防災に役立つウェブサイト

防災グッズは何を用意したらいいのか？全リスト

検索

家庭で防災用品を用意する際のポイントを紹介しています。
運営：株式会社オールアバウト

防災グッズの紹介

検索

非常持ち出し袋に最低限必要なものを紹介しています。
運営：総務省消防庁

サバ・メシ コンテスト

検索

おいしい非常食のレシピコンテスト。非常時でも作れるレシピが掲載されています。
運営：エフエム仙台

未来へのキオク

検索

震災で失われた美しい風景や懐かしい景色などを掲載しているインターネット上の写真・動画共有サービスです。
運営：NPO 法人 20 世紀アーカイブ仙台

ひなぎく NDL 東日本大震災アーカイブ

検索

東日本大震災に関するデジタルデータを一元的に検索・活用できるポータルサイト
運営：国立国会図書館

取組

災害時に役立つ生活の知恵を皆で考える

停電や断水、物流機能の麻痺など災害時に想定される生活を疑似体験することで、災害時に何が必要かをより具体的に考えられるようになります。災害時の生活をリアルにイメージできるよう、写真展示や非常食コンテストなどのイベントが開催されています。

震災の心構え

全国から希望する声があり、累計 110 か所で震災の生活ぶりが分かる写真のパネル展示を行った。全国から多くのコメントをいただいたのだが、中でも一番うれしかったのは「震災時の生活ぶりがよく分かった」というコメントだ。

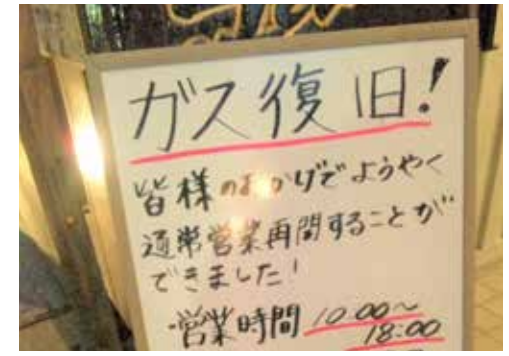
NPO 法人 20 世紀アーカイブス 佐藤 正実氏



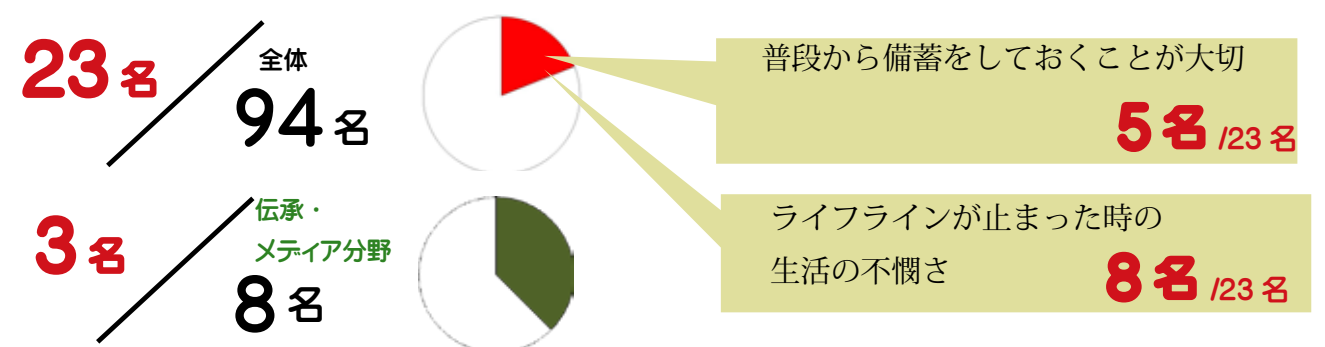
平常時からの備え

2006 年から毎年『サバ・メシ・コンテスト』と銘打った非常食のコンテストを開催してきた。震災後グランプリを取った方から「コンテストに参加していたおかげで子どもたちがとても落ち着いていた」とメールをいただいた。災害時をイメージしてレシピを考えたと経験が安心感につながったそう。

ラジオパーソナリティー 板橋 恵子氏



トピックについて発言した人数とキーワード



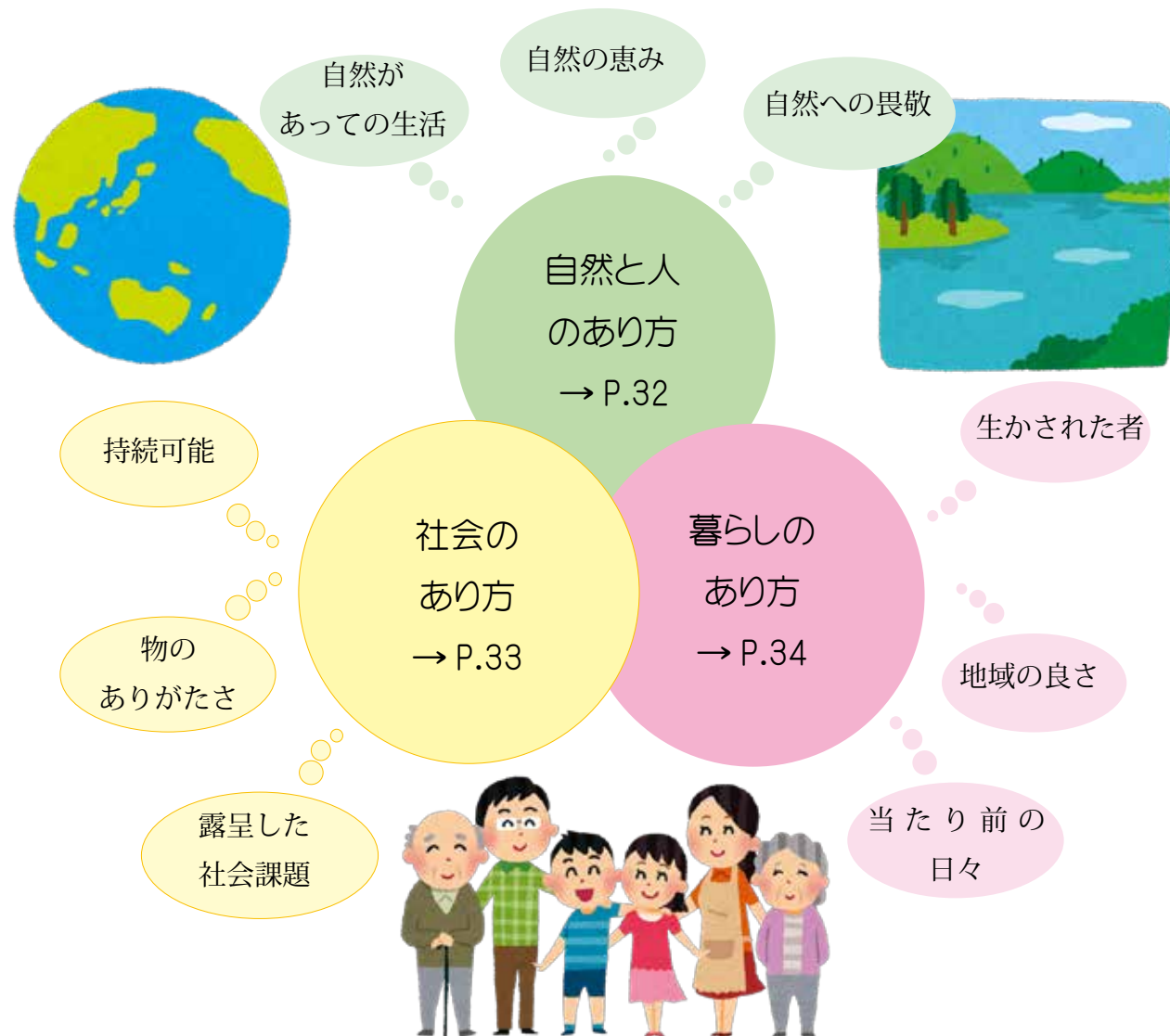
東日本大震災の経験による

価値観の変化

東日本大震災を経て、人間が持つ技術の限界を認識し、改めて人と自然の関わり方を見直そうとする機運が高まりました。「価値観」のページでは、東北の人々から異口同音に語られたキーワードを3つのトピックスで紹介しています。



価値観を 考える 3つのトピックス



「価値観」ページの読み方



①トピックス

「価値観」ページでは、3つのトピックスを取り上げています。

②具体的な価値観の紹介

「3.11 あの時」レポートから、東日本大震災を経験したことによって変化した価値観について抜粋しました。



「3.11 あの時」 ヒアリング風景

EPO 東北スタッフが直接お伺いして、1～2時間程度、時には3時間以上かけてヒアリングを行い、レポートを作成しています。実際に現場を見せていただくこともあります。お話をくださった皆様の想いや言葉、空気が読み手に伝わるよう心がけてレポートにとりまとめています。





自然への畏敬

人間は自然と切り離されて生きることはできない。文明があまりにも高度化し、その便利さに慣れてしまい、自然への畏敬の念を我々は失っていた。しかし、大震災は、人と人、人と自然の関係を隔てていたものを取り払ったともいえる。

宮城大学 風見 正三氏



自然の恵みを感じた

私にとっての豊かさは全て断絶された中でも湧いてくる自然の恵みの「お湯」、またそのお湯を組み上げる仕組みを作ってくれた先祖とのつながりを象徴している。温泉に入ること地球とつながり地球と共生する。我々は自然がないと生きられない。

旅館大沼 大沼 伸治氏



自然に逆らわない

無駄に電気を使う生き方ではなく、自然にマッチした生き方とはどのようなものなのかを考え直す時期に来ていると思う。震災を経て、神社や古くからある墓地が高い所にある理由が分かった。これらはすべてが残った。自然の驚異の前では人間はいかに弱々しい生き物だ。自然に抵抗しない、「沈下橋」のような構造物、生き方が大切だと思うようになった。

NPO 法人 フー太郎の森基金 新妻 香織氏



物のありがたさに気づいた

一生懸命ものづくりに励んでも、世の中にはたくさんの方が溢れている。もしも、壊れてしまっても、思いついたらすぐに買いに行く。直して大切にすれば5年、10年使えるものもたくさんある。どこかで歯止めをかけなければ、ますます人を駄目にする社会になっていくと思う。この大震災がそうした社会を食い止めるきっかけになるのではないかなと思う。

マシンパーツ精密工業 柏木 友浩氏



便利ゆえの脆さ

蛇口をひねるだけで水が出てくる世界はなんと便利なんだろう。だがそれは、食べることも噛むことも不要な点滴を受けているようなものではないかと思った。我々は点滴が止まれば生きていけないような社会に住んでいるのではないだろうか。

東北大学大学院 新妻 弘明氏



新しい価値観の芽生え

僕たちの生活している現代の社会システムは完全に破綻している。物質的なものが無くなって、新たな町が興る時に、これまでと違う価値観が生まれるだろうと思った。復興するプロセスの中で良い意味で世界が抱える課題を解決する希望があるのではないかと感じていた。

個人 伊勢崎 克彦氏





長続きするライフスタイルを

日本が欧米化する中で、もともと持っていた自分たちの良さを捨ててきてしまった。今まで物質的な豊かさを求めて便利な生き方をしてきたが、それはとても危うく長続きしない。生きていく上で何が一番大切なのか。原点に立ち戻ってもっと長持ちするライフスタイルを考えていかなければ、これから先の未来は描けないと思う。

日本雁を保護する会 呉地 正行氏



日々の生活に感謝を

日々心豊かに生きられるように、自分にとって何が大事なのか、どう生きていくかが重要だと思う。家族と共に毎日美味しい食事をして、仕事ができ、自然の恵みの元で生きていけるありがたみを感じている。

石村工業株式会社 石村 眞一氏



日頃からのつながりを大事に

人とのつながりは何かがあってからどうにかしようとしてもどうしようもないし、急に相手がいなくなってしまう事もある。震災がなければ、何気なくやり過ごしていたであろう日常の大事さに気づく事もなかっただろう。天災、特に地震は突然訪れる。そうした事を考えると、日頃からの感謝の気持ちを忘れない事、それを伝える事、そしてつながりを大事にしておかなければいけないと改めて思う。

小岩井農牧株式会社 鎌田 徹氏



「3.11 あの時」参考レポート 一覧

「3.11 あの時」レポートには東日本大震災から得られた「東北の教訓」が記録されています。本書は、東日本大震災を経て東北の方々が学んだことを伝えるために、「3.11 あの時」レポートから活動事例を抜き出し、「支援」「エネルギー」「伝承×ESD」「価値観」の4つのキーワードに焦点をあてて整理したものです。

「3.11 あの時」参考レポート一覧ページでは、本書を作成する際に特に参考にしたレポートを掲載しています。

あの時何が起きたか、現場で起きた課題や支援活動の記録、そして東北の方々が大地震からの教訓として感じていることが克明に記されている「3.11 あの時」レポートもぜひお読みください。

一覧ページの読み方



①おすすめレポート

本書で紹介した事例や教訓が記されている「3.11 あの時」レポートの一覧を五十音順に掲載しました。

- ・名前
- ・所属
- ・掲載冊子のステージ番号
- ・レポート番号
- ・掲載ページ
- ・レポートタイトル

②対応するカテゴリー

「3.11 あの時」レポートを読むには

■冊子を読むには・・・

「3.11 あの時」レポートは冊子化し無料配布しています。現在は2011年度版、2012年度版、2013年度版の3種類です。ご希望の方はEPO 東北へお立ち寄りください。郵送をご希望の方はEPO 東北までお問い合わせください。送料はご負担くださいますようお願いいたします。

■ウェブサイトを読むには・・・

EPO 東北のウェブサイトにて冊子のPDFデータを公開しております。





足立 千佳子氏
(NPO 法人 まちづくり政策フォーラム)

Stage 2011 Report 17 P.37

「女性のための支援へ。東北人がつなげる現地と支援者」

Stage 2012 Report 4 P.13

「被災者」「支援者」ではなく、地元の人間として一緒に活動したい。」

支援



鏡 啓記氏
(NPO 法人 あきた地域資源ネットワーク)

Stage 2012 Report 18 P.53

「それぞれの土地にある多くの智慧を、次の世代に」

支援



有坂 美紀氏
(個人)

Stage 2012 Report 31 P.88

「石巻で出会った人たちは、わたしの宝物」

支援



石村 眞一氏
(石村工業株式会社)

Stage 2013 Report 5 P.21

「日々心豊かに生きられるように」

エネルギー



伊勢崎 克彦氏
(個人)

Stage 2013 Report 5 P.21

「遠野を農的な暮らしができる集落のモデルに」

価値観



板橋 恵子氏
(ラジオパーソナリティ)

Stage 2011 Report 30 P.64

「停電状態の中唯一生き残ったメディアとしての責任感。」

ESD × 伝承



岩崎 昭子氏、伊藤 聡氏
(宝来館)

Stage 2011 Report 7 P.17

「津波に襲われ生き残った私たちの経験は、これからの日本のための経験。」

支援



大澤 継弥氏、畑村 茂氏、廣内 幸作氏
(だらすこ工房)

Stage 2013 Report 6 P.24

「千年後の未来、村や後世を想って」

エネルギー

ESD × 伝承



大沼 伸治氏
(旅館大沼)

Stage 2012 Report 8 P.22

「温泉に入ることによって地域とつながり、自然と共生する。」

価値観



奥 ちひろ氏
(NPO 法人 秋田県南 NPO センター)

Stage 2013 Report 22 P.78

「秋田で一緒に地域を考える仲間を増やしたい」

支援



小野 寿光氏
(株式会社 馬渕工業所)

[Stage 2013 Report 17 P.59](#)

「持続可能で安全安心な社会を目指して」

支援



風見 正三氏
(NPO 法人 まちづくり政策フォーラム)

[Stage 2012 Report 13 P.39](#)

「志の連鎖。未来への希望を絶やさない。」

価値観



柏木 友浩氏、柏木 亜希子氏、村上 純之
(マシンパーツ精密工業)

[Stage 2013 Report 16 P.57](#)

「地域で自給できるエネルギー」

価値観



鎌田 徹氏
(小岩井農牧株式会社)

[Stage 2013 Report 3 P.15](#)

「東北の皆で頑張っていかなきゃ」

支援



川村 久美氏
(NPO 法人 いしのまき環境ネット)

[Stage 2011 Report 21 P.44](#)

「石巻市民の私たちにできることを考えながら。」

[Stage 2012 Report 3 P.12](#)

「ありがとう」の言葉が活動の原動力。かけぬけた1年間。」

支援



菊地 ひろ子氏
(個人)

[Stage 2012 Report 5 P.15](#)

「海と共に、気仙沼で生きてきたことは誇り。」

ESD ×
伝承



菊地 満氏
(社会福祉法人 自立更生会 盛岡アビリティセンター)

[Stage 2011 Report 3 P.10](#)

「震災直後24時間フル稼働したBDF精製 必要性の認知拡大へ」

エネルギー



木下 牧子氏、岡 菜実氏
(ACT53 仙台 事務局メンバー)

[Stage 2011 Report 22 P.48](#)

「震災で唯一良かったことは。一番大事なことがわかったこと。」

支援



呉地 正行氏
(日本雁を保護する会)

[Stage 2011 Report 18 P.39](#)

「生きる力のヒントはかつての日本文化の中に。自然の猛威と恵み。」

価値観



小金澤 孝昭氏
(宮城教育大学)

[Stage 2012 Report 14 P.42](#)

「子どもたちと、ともに学びあうことがESDをはじめる第一歩。」

[Stage 2013 Report 18 P.63](#)

「いぐねは仙台平野復興のシンボル」

ESD ×
伝承



後藤 一磨氏
(個人)

Stage 2012 Report 10 P.28

「南三陸町から新たなライフスタイルや価値観を提供していきたい。」

ESD ×
伝承



齋藤 昭子氏
(みやぎ生協協同組合)

Stage 2013 Report 21 P.75

「忘れず、つながりをきらず、伝え続ける事の大事さ」

ESD ×
伝承



齋藤 和人氏
(NPO 法人 山形の公益活動を応援する会・アミル)

Stage 2012 Report 19 P.56

「連携し、協働することでさらに力は強くなる。」

支援



佐藤 正実氏
(NPO 法人 20 世紀アーカイブ仙台)

Stage 2013 Report 20 P.70

「震災後の生活をジブンゴトとして全国に伝える」

ESD ×
伝承



杉浦 恵一氏
(一般社団法人 Nr.12)

Stage 2013 Report 11 P.39

「灯すことを 100 年や 200 年も続く文化にしたい」

支援



鈴木 悦子氏
(オフィス e)

Stage 2013 Report 19 P.66

「人と人、人とコミュニティを「つなげる」」

ESD ×
伝承



砂子 啓子氏
(i- くさのねプロジェクト)

Stage 2013 Report 10 P.36

「被災者と支援者、両方の目線で宮城と佐賀の橋渡し」

支援



武内 賢二氏
(ソーラーワールド株式会社)

Stage 2012 Report 20 P.59

「「自然エネルギーっていいんだな」と心から思う人を増やしたい。」

エネルギー



太宰 幸子氏
(宮城県地名研究会)

Stage 2012 Report 10 P.28

「地名に込められた先人からのメッセージ。」

ESD ×
伝承



千田 信良氏
(有限会社 千田清掃)

Stage 2013 Report 13 P.47

「菜の花でつながる縁」

エネルギー



千葉 和氏
(NPO 法人 遠野エコネット代表理事)

Stage 2011 Report 1 P.7

「多くの団体と連携して遠野被災地支援ボランティア「遠野まごころネット」
設立」

支援



中田 俊彦氏
(東北大学大学院)

Stage 2011 Report 26 P.56

「「新しい暮らし」を自分達で生み出し、地元「エネルギーの駅」を作ろう」

エネルギー



新妻 香織氏
(NPO 法人 フー太郎の森基金)

Stage 2011 Report 31 P.68

「松川浦ガイドブックを持って避難所訪問、干潟に残ったかすかな生き物の気配」

Stage 2012 Report 28 P.80

「震災の思い、志が未来に伝わるものに」

支援



新妻 弘明氏
(東北大学大学院)

Stage 2011 Report 29 P.62

「1 人ひとりの死が 1 万数千件あった災害。失われたのは普通の地域の普通の人々の営み」

エネルギー

価値観



日塔 マキ氏
(女子の暮らしの研究所 株式会社 GIRLSLIFELABO)

Stage 2013 Report 25 P.88

「福島の「今」を発信して、「自分の暮らし」について考えられる社会を作りたい」

支援



野中 章久氏
(独立行政法人 東北農業研究センター)

Stage 2013 Report 8 P.31

「自分達の面倒を見ることの重要性を投げかけた」

エネルギー



広瀬 剛史氏
(ReRoots)

Stage 2012 Report 11 P.31

「地域が存続できる農業を目指したい。」

支援



廣水 乃生氏
(コミュニティファシリテーション研究所)

Stage 2012 Report 33 P.95

「自分たちの力を取り戻すための、福島での対話の場づくり」

支援



松田 賢雄氏
(社会福祉法人 睦会 障害者支援施設遠野コロニー)

Stage 2011 Report 4 P.12

「大震災からの復旧を支えた BDF 燃料」

エネルギー



三澤 章氏
(NPO 法人 あおもり NPO サポートセンター)

Stage 2013 Report 1 P.9

「「人」を育て、「想い」をつなぐ」

ESD × 伝承



山内 宏泰氏
(個人)

Stage 2012 Report 6 P.17

「シャッターを切った理由。ただの記録ではなく、記憶を後世に」

**ESD ×
伝承**



山田 好恵氏
(株式会社 一ノ蔵)

Stage 2013 Report 12 P.42

「次世代を想い、10年後の未来を思い描きながら」

支援



吉田 恵美子氏
(NPO 法人 ザ・ピープル)

Stage 2011 Report 35 P.74

「物資支援、炊き出し、雇用創出・・・地域の外からの支援に支えられて。」

Stage 2012 Report 23 P.69

「福島のことからの 10 年、20 年、30 年後に向けた動きを」

支援



3.11 あの時 教訓事例集

発行年月日：2017 年 3 月 31 日

監 修：新妻弘明（東北大学名誉教授・日本EIMY研究所 所長）

編 集：東北環境パートナーシップオフィス（EPO 東北）

発行：東北環境パートナーシップオフィス（EPO 東北）

Office 〒 980-0014 宮城県仙台市青葉区本町 3-2-23 仙台第 2 合同庁舎 1F

TEL 022-290-7179 FAX 022-290-7181

E-mail info@epo-tohoku.jp

URL <http://www.epo-tohoku.jp/>

